

高知方言における「マケル」「コボレル」「アフレル」 「モレル」「モル」の意味分析

橋 尾 直 和

1. はじめに

高知方言において、「コボレル」と意味が類似した動詞に「マケル」がある。次のような文では、用法に差は見られない。

- (1) 水が マケル。
- (2) 水が コボレル。

「マケル」「コボレル」は、水が〈内部から外部へ移動し下に落ちる〉という意味特徴を持つ点で共通している。しかし、以下の文では用法に差が見られる。

- (3) *水が 一滴 マケル。
- (4) 水が 一滴 コボレル。

本論では、高知方言の動詞「マケル」を中心に、その類義語である「コボレル」「アフレル」「モレル」「モル」の意味分析を行い、その意味・用法の差を明らかにしたい。

2. 従来 of 記述

2.1. 辞書の記述¹

マケル こぼれる。(「まく」の自動詞)「お茶がマケた」「そんなことしよったら、
コーヒーがマケルぞね」(女の言葉)。

(『高知県方言辞典』)

こぼれる ① 液体や粉状・粒状のものが あふれて落ちる。

「バケツの水がこぼれる」

②一定の範囲から外へ(もれて)出る。

「明かりがこぼれる」

③あふれ出る。あふれるように表にあらわれる。

「笑みがこぼれる」

(『現代新国語辞典』)

これらの記述より、高知方言の動詞「マケル」の説明として「こぼれる」が、さらに共通語の動詞「こぼれる」の説明として「あふれる」が用いられていることが分かる。

2.2. 文献の記述²

2.2.1. 「マケル」

竹村(1985)では、「マケル」を次のように記述している。

土佐の「マケル」は液体が容器からこぼれることをいう。容器は茶わん・杯・なべ・かま・バケツなどの家庭の日用品の場合が多い。

また、土居(1986)では、次のように記述している。

「畳へお茶をマイた」「そんなにゆすったら、コーヒーがマケル」「ビールがマケた」
上の例文は「お茶をこぼした」「コーヒーがこぼれる」「ビールがこぼれた」と言わなければ標準的でない。「マク」はいわゆる他動詞であり、「マケル」は自動詞である。(中略)筆者などもよほど標準語を意識しない限り、「こぼす」「こぼれる」は使えないくらいである。

この報告に対して、今回行った調査の結果、現在の老年層の話者は、「マケル」「コボレル」両語を使い分けしていることが確認された。

2.2.2. 「もれる」「もる」「こぼれる」「あふれる」

柴田(1976)では、次のように分析している。

①「もれる」「こぼれる」

(a) *時間がざらざらと私から もれる。

(b) 時間がざらざらと私から こぼれる。(高見順の詩『過去の時間』より)

「もれる」は物が〈少量ずつ移動する〉ことであるのに、「ざらざら」とは物が大量に移動する様子を描写することばであるから、(a)は意味の上で反発し合うらしいことが分かる。また、「もれる」は「すきま」のような〈小さい、狭い口からの移動〉でなくてはならず、次のような大きい、広い口から「もれる」わけにはいかない。

(c) *やかんの口から もれる。

(d) やかんの口から こぼれる。

一方、「もれる」も「こぼれる」も、ともに、〈あるべき位置から離れる〉ことで、「よくないこと」なのである。「よくない」というのは、(b)の例文でいうと、「残り少ない大事な時間がこぼれる」ということを言っている。また、「時間のもれる音」という表現を上詩では用いている。消えてはいけぬ時間というものがあるがどこかのすきまから、秒刻みに少量ずつ逃げていくことを示している。

②「こぼれる」「あふれる」

「こぼれる」と「あふれる」は〈物質の一部が内部から外部へ移動する〉という点が共通している。

(e) (目の中から外へ)涙が こぼれる。

(f) (目の中から外へ)涙が あふれる。

さらに、移動の主体が〈気体を除く物質〉という点も共通している。

(g) *ガスが こぼれる。

(h) *ガスが あふれる。

「こぼれる」と「あふれる」を(e)・(f)の例文にもどり比較すると、涙が「あふれる」場合は、必ずしも外へ出なくてもいいが、「こぼれる」場合は、必ず外へ出て〈下に落ちる〉ことがなくてはいけない。このことは、外部の原因によって起こるのが「こぼれる」で、内部からいっぱいになって起こるのが「あふれる」だと言うこともできる。だから、次の例文のような違いが生じる。

(i) *川が こぼれる。

(j) 川が あふれる。

「あふれる」は場所を主題にすることができ、川水の〈移動の場所〉を強調している。それに対し、「こぼれる」は移動する物自体のことに注目しているのである。

柴田(1976)より、「もれる」「こぼれる」「あふれる」について、次のような意味特徴を取り出すことができる。

①もれる： 〈少量ずつ移動〉〈狭い口からの移動〉

①②共通： 〈あるべき位置から離れる〉〈物質の一部分が内部から外部へ移動する〉

②こぼれる： 外へ出て〈下に落ちる〉〈外部の原因による〉

あふれる： 〈あるべき位置から離れる〉こととは無関係、〈移動の場所〉を強調、
〈内部からいっぱいになって起こる〉

また、「もれる」と「もる」の違いについて、以下のように記述している。

(k) 名簿(選・くじ)に もれる。

(l) *名簿(選・くじ)に もる

(m) *このくつ(風呂おけ)は もれる。

(n) このくつ(風呂おけ)は もる。

「名簿にもれる」は、名簿にない名前自身を問題にしているのであり、「このくつはもる」は、水がしみ込むようなくつそのものを言っているのである。

「もる」と「もれる」はさらに次のような違いもある。

(o) ためいきが もれる。

(p) *ためいきが もる。

(r) 明かりが外へ もれる。

(s) *明かりが外へ もる。

(t) 砂が指のすきまから もれる。

(u) *砂が指のすきまから もる。

「もる」のほうは、移動の主体に制限があつて、音や光や砂が「もる」ことは許されない。

ここで、「もれる」と「もる」の意味の特徴を書き出しておこう。「もれる」は、①どんな形のものであれ、②物質の一部分が③あるべき場所を離れて、④少量ずつ、⑤小さい、狭い口を通して、⑥しきりを越えた場所に移動することで、特に⑦移動する物

体に焦点を置いている。これに対して、「もる」は、①音・光・砂などを除く②物質の一部分が③あるべき場所を離れて、④少量ずつ、⑤小さい、狭い口を通して、⑥しきりを越えた場所に移動することで、特に⑦移動の場所に焦点を置いている。

次章では、以上を参考にしながら、「マケル」「コボレル」「アフレル」「モレル」「モル」の分析を行うことにする。

3. 分析

3.1. 主体

- (5) 水が マケル。 (= (1))
- (6) 水が コボレル。 (= (2))
- (7) 水が アフレル。
- (8) 水が モレル。
- (9) 水が モル。
- (10) *砂が 指のすきまから マケル。
- (11) 砂が 指のすきまから コボレル。
- (12) *砂が 指のすきまから アフレル。
- (13) 砂が 指のすきまから モレル。 (= (t))
- (14) *砂が 指のすきまから モル。 (= (u))
- (15) 粉が 袋から マケル。
- (16) 粉が 袋から コボレル。
- (17) 粉が 袋から アフレル。
- (18) 粉が 袋から モレル。
- (19) *粉が 袋から モル。
- (20) 鉛筆が マケル。
- (21) *鉛筆が コボレル。
- (22) *鉛筆が アフレル。
- (23) *鉛筆が モレル。
- (24) *鉛筆が モル。
- (25) *音が マケル。
- (26) *音が コボレル。
- (27) *音が アフレル。
- (28) 音が モレル。
- (29) *音が モル。
- (30) *明かりが外へ マケル。
- (31) *明かりが外へ コボレル。

(32) *明かりが外へ アフレル。

(33) 明かりが外へ モレル。 (= (r))

(34) *明かりが外へ モル。 (= (s))

(5)から(34)より、「マケル」は主体が〈音・光などを除く物質の一部分〉、「コボレル」は〈棒状の固体、音・光などを除く物質の一部分〉、「アフレル」は〈棒状の固体、音・光などを除く物質の一部分〉、「モレル」は〈棒状の固体を除く物質の一部分〉、「モル」は〈液体の一部分〉であることが分かる。したがって、主体が棒状の固体である場合には、「マケル」のみしか用いることができないことが分かる。

(35) *ガスが マケル。

(36) *ガスが コボレル。 (= (g))

(37) *ガスが アフレル。 (= (h))

(38) ガスが モレル。

(39) *ガスが モル。

ただし、次のような場合、「モル」は成文となる。

(40) この風船は モル。

このように、主体が気体である場合には、「モレル」「モル」だけ使うことができることが分かる。

以上のことから、主体における意味特徴をまとめてみると、次の通りである。

「マケル」 : 〈気体、音・光などを除く物質の一部分〉

「コボレル」 : 〈気体、棒状の固体、音・光などを除く物質の一部分〉

「アフレル」 : 〈気体、棒状の固体、音・光などを除く物質の一部分〉

「モレル」 : 〈棒状の固体を除く物質の一部分〉

「モル」 : 〈液体の一部分〉

3.2. 離れる場所

(41) 水が 風呂おけから マケル。

(42) 水が 風呂おけから コボレル。

(43) 水が 風呂おけから アフレル。

(44) 水が 風呂おけから モレル。

(45) 水が 風呂おけから モル。

(46) お茶が 茶わんから マケル。

(47) お茶が 茶わんから コボレル。

(48) お茶が 茶わんから アフレル。

(49) *お茶が 茶わんから モレル。

(50) お茶が 茶わんから モル。

(41) (46) より、「マケル」の離れる場所は、〈容器〉であることが分かる。

- (51) * (目の中から外へ) 涙が マケル。
- (52) (目の中から外へ) 涙が コボレル。(= (e))
- (53) (目の中から外へ) 涙が アフレル。(= (f))
- (54) * (目の中から外へ) 涙が モレル。
- (55) * (目の中から外へ) 涙が モル。

(43) (48) (53) より、「アフレル」の離れる場所は、〈内部〉であることが分かる。

- (56) せっかく入れたお茶が コボレル。
- (57) 風船から 空気が モレル。
- (58) タンクから 水が少しずつ モル。

(56) (57) (58) より、「コボレル」「モレル」「モル」の離れる場所は、〈あるべき場所〉であることが分かる。

以上のことから、離れる場所における意味特徴をまとめてみると、次の通りである。

- 「マケル」 : 〈容器の内部〉
- 「コボレル」 : 〈あるべき場所〉
- 「アフレル」 : 〈内部〉
- 「モレル」 : 〈あるべき場所〉
- 「モル」 : 〈あるべき場所〉

3.3. 移動の量

- (59) 水が こじゃんと (たくさん) マケル。
- (60) *水が こじゃんと (たくさん) コボレル。
- (61) 水が こじゃんと (たくさん) アフレル。
- (62) *水が こじゃんと (たくさん) モレル。
- (63) *水が こじゃんと (たくさん) モル。
- (64) ?水が ちょびっと (少し) マケル。
- (65) 水が ちょびっと (少し) コボレル。
- (66) *水が ちょびっと (少し) アフレル。
- (67) ?水が ちょびっと (少し) モレル。
- (68) ?水が ちょびっと (少し) モル。
- (69) *水が ちょびっとずつ (少しずつ) マケル。
- (70) *水が ちょびっとずつ (少しずつ) コボレル。
- (71) *水が ちょびっとずつ (少しずつ) アフレル。
- (72) *水が ちょびっとずつ (少しずつ) モレル。
- (73) 水が ちょびっとずつ (少しずつ) モル。

- (74) *水 (おかき) が 一滴 (個) マケル。 (= (3))
 (75) 水 (おかき) が 一滴 (個) コボレル。 (= (4))
 (76) *水 (おかき) が 一滴 (個) アフレル。
 (77) *水 (おかき) が 一滴 (個) モレル。
 (78) *水 (おかき) が 一滴 (個) モル。
 (79) 水 (おかき) が 二、三滴 (個) マケル。
 (80) 水 (おかき) が 二、三滴 (個) コボレル。
 (81) *水 (おかき) が 二、三滴 (個) アフレル。
 (82) *水 (おかき) が 二、三滴 (個) モレル。
 (83) *水 (おかき) が 二、三滴 (個) モル。

以上のことから、移動の量における意味特徴をまとめると、次の通りである。

- 「マケル」 : 〈二、三滴・個以上〉
 「コボレル」 : 〈少量だけ〉
 「アフレル」 : 〈多量に〉
 「モレル」 : 〈少量ずつ〉
 「モル」 : 〈少量ずつ〉

3.4. 移動の要因

- (84) いっぱいになって 風呂の水が マケル。
 (85) *いっぱいになって 風呂の水が コボレル。
 (86) いっぱいになって 風呂の水が アフレル。
 (87) *いっぱいになって 風呂の水が モレル。
 (88) *いっぱいになって 風呂の水が モル。
 (89) 急ブレーキをかけられて ジュースが マケル。
 (90) 急ブレーキをかけられて ジュースが コボレル。
 (91) *急ブレーキをかけられて ジュースが アフレル。
 (92) *急ブレーキをかけられて ジュースが モレル。
 (93) *急ブレーキをかけられて ジュースが モル。

これらによって、「マケル」「コボレル」は〈外部の原因〉によって、内容物が外部に移動することであり、「アフレル」は〈内部からいっぱいになって〉移動することであることが分かる。以上のことから、移動の要因における意味特徴をまとめると、次の通りである。

- 「マケル」 : 〈外部の原因によって〉
 「コボレル」 : 〈外部の原因によって〉
 「アフレル」 : 〈内部からいっぱいになって〉

- 「モレル」 : 〈無関係〉
「モル」 : 〈無関係〉

3.5. 移動の仕方

- (94) 水が 床に マケル。
(95) 水が 床に コボレル。
(96) ?水が 床に アフレル。
(97) *水が 床に モレル。
(98) *水が 床に モル。

(94) (95) より、「マケル」「コボレル」は移動の仕方が、〈外部へ移動し、下に落ちる〉ことであることがわかる。

- (99) おかしくて涙が アフレル。

- (100) 元気が アフレル。

(99) (100) より、「アフレル」は、いっぱいになった後〈外部へ移動する〉ことのみであることが分かる。

- (101) *タンクの穴から 水が マケル。
(102) *タンクの穴から 水が コボレル。
(103) *タンクの穴から 水が アフレル。
(104) タンクの穴から 水が モレル。
(105) タンクの穴から 水が モル。
(106) *このバケツは すきまから マケル。
(107) *このバケツは すきまから コボレル。
(108) *このバケツは すきまから アフレル。
(109) このバケツは すきまから モレル。
(110) このバケツは すきまから モル。

(104) (105) (109) (110) より、「モレル」「モル」は〈小さい、狭い口を通して、しきりを越えた場所に移動する〉ことであることが分かる。

以上のことから、移動の仕方における意味特徴をまとめると、次の通りである。

- 「マケル」 : 〈外部へ移動し、下に落ちる〉
「コボレル」 : 〈外部へ移動し、下に落ちる〉
「アフレル」 : 〈外部へ移動する〉
「モレル」 : 〈小さい、狭い口を通して、しきりを越えた場所に移動する〉
「モル」 : 〈小さい、狭い口を通して、しきりを越えた場所に移動する〉

3.6. 焦点の位置

- (111) 川が アフレル。 (= (j))
 (112) 名簿 (選・くじ) に モレル。 (= (k))
 (113) この風呂おけは モル。 (= (n))

これらに代表されるように、「アフレル」「モレル」「モル」については、特に焦点を置く位置がある。しかし、「マケル」「コボレル」は、この点では無関係である。

以上のことから、焦点の位置における意味特徴をまとめると、次の通りである。

- 「マケル」 : 〈無関係〉
 「コボレル」 : 〈無関係〉
 「アフレル」 : 〈特に、移動の場所に焦点を置いている〉
 「モレル」 : 〈特に、移動する物体に焦点を置いている〉
 「モル」 : 〈特に、移動の場所に焦点を置いている〉

3.7. 派生的用法

- (114) *笑みが マケル。
 (115) 笑みが コボレル。
 (116) 笑みが アフレル。
 (117) *笑みが モレル。
 (118) *笑みが モル。
 (119) *つい愚痴が マケル。
 (120) つい愚痴が コボレル。
 (121) *つい愚痴が アフレル。
 (122) つい愚痴が モレル。
 (123) *つい愚痴が モル。
 (124) 元気が マケル。
 (125) 元気が コボレル。
 (126) 元気が アフレル。 (= (100))
 (127) 元気が モレル。
 (128) 元気が モル。
 (129) *人が マケル。
 (130) *人が コボレル。
 (131) 人が アフレル。
 (132) *人が モレル。
 (133) *人が モル。

以上により、派生的用法は「マケル」「モル」には存在しないことが分かる。

4. おわりに

以上の分析をもとに「マケル」「コボレル」「アフレル」「モレル」「モル」の意義素をまとめると、次の通りである。

- 「マケル」：《気体、音・光などを除く物質の一部が、容器の内部から、二、三滴・個以上、外部の原因によって、外部へ移動し、下に落ちること。》
- 「コボレル」：《気体、棒状の固体、音・光などを除く物質の一部が、あるべき場所を離れて、少量だけ、外部の原因によって、外部へ移動し、下に落ちること。》
- 「アフレル」：《気体、棒状の固体、音・光などを除く物質の一部が、内部から、多量に、内部からいっぱいになって、外部へ移動すること。特に、移動の場所に焦点を置いている。》
- 「モレル」：《棒状の固体を除く物質の一部が、あるべき場所を離れて、少量ずつ、小さい、狭い口を通して、しきりを越えた場所に移動すること。特に、移動する物体に焦点を置いている。》
- 「モル」：《液体の一部が、あるべき場所を離れて、少量ずつ、小さい、狭い口を通して、しきりを越えた場所に移動すること。特に、移動の場所に焦点を置いている。》

なお、本稿を成すに当たり、1994年11月に面接調査を行った。その際、高知県南国市出身の浜口和枝氏（大正7年生）のご協力を得ることができた。ここに、記して感謝申し上げたい。

【注】

1. 分かりやすくするため、動詞の部分は、棒線の代わりにそのまま書き込むことにした。
2. 本論では、分析対象となる方言の動詞のみにカタカナ表記を用い、共通語の動詞にはひらがなを用いた。また、引用部分に関しては、一部修正・加筆を施している。

【参考文献】

- 柴田武編(1976)『ことばの意味』平凡社
竹村義一(1985)『土佐弁さんぽ』高知新聞社
土居重俊(1986)『土佐なまり』筑摩書房
田中茂範編著(1987)『基本動詞の意味論－コアとプロトタイプ－』三友社出版
土居重俊・浜田数義編(1985)『高知県方言辞典』高知市文化振興事業団
金田一春彦編(1994)『現代新国語辞典』学研
(はしお なおかず・高知女子大学文学部助教授)